Roman

好色一代男

藤原審爾

Roman Books

著者の了
解により
検印廃止

昭和37年8月10日　第1刷発行
昭和38年10月31日　第2刷発行

著者　藤原審爾
発行者　野間省一
印刷所　株式会社 常磐印刷所
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽町3ノ1
振替東京3930
電話大塚(942)大代表1111

好色一代男

¥ 200

© 藤原審爾 一九六二

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)　(加藤製本)

好色一代男

新版好色一代男

一千九百某年頃、大阪上本町誓願寺附近に住む某なる無名の文学青年があった。既に四十近く二子を得ていたが、数年来女房を紅灯の街に働かして糊口を凌ぎつつ、日夜創作に力をつくしていた。イリュージョンの絶えれば、すなわち、誓願寺へ徨い西鶴墓前に佇み、想の絶えざるを祈った。不思議と霊感あり、青年は常に稿を続けるを得ておった。

而し現実は極めて辛く、出版界は蒙昧にして文壇に現れることが出来なかった。素より青年の精神は高く、かかる表面の一現象に捉われるなく、日夜研鑽に勤しんでいたものであるが、ここに研鑽に勤しむのあまり、身体を損い、突如としてインポ状態に墜ちた。

ただちに、近時、婦人雑誌等々に研究論文を発表されている篤学なる医学博士、或いは性の権威にして俗界へ親しく動座され、何々相談などいう煩事を進んで人々のためにされている医学博士たちに、遠く東京まで旅行し診察を受けたが、全く治懊の見込みなしと宣告された。

生涯のインポであれば、女房の許へ帰るとも詮方とてなく、失意懊悩の果、とある宿へ蹌踉

试读结束：需要全本请在线购买： www.ei

乎として泊った。その夜、死または生かと懐悩を重ね、暁方を迎えるに到ったものであるが、その間僅か数分の微睡のうち、奇怪至極の夢を見た。

揺起され目を醒し見れば、枕元に見知らぬ老人が坐っている。驚いて青年は訊いた。

「失敬やないか、人の部屋に黙って這入りなはって、あんた誰や。」

「世之介どすがな。」

「世之介ちゅうて何処の世之介さんや。」

「西鶴の世之介ですがな。」

青年は慌てて飛び起きた。

「なんや、そんならそうと、早ようから言うてくれはったら、なんや、まあ、どうぞフトンあてとくんなはれ、ずうと寄っとくんなはれ、で、なんかいな、どないな用件だす。」

「別になんちゅう程のこってもあらしまへん、うちの先生がな、まあ、常々や、あんたさんがお詣りしてくれるによってや、気の毒に思いなはりまして、『こら世之介、一遍、激励してやって来』と言やはりますで、病気見舞に伺わしてもろうたわけや。」

「そりゃまあわざわざ御苦労はんで。」

「ところでな、ここから東南に五キロ半行くちゅうと、秋津世之介ゆうて六十九になりよるおやじが居なさる。わしと同んなじ名で齢が一つ上の男や。このおやじさん三千七百四十三人いきなはった豪傑やで、なんぞ浮世のええ智慧もあろうというもんや、一遍いってみたらどや、

色と慾しか認めへんけったいな男やが、あんたの病いなら、ひょっと直りよるかもしれんで、すすめに来たわけや。思い立ったら吉日やで、今日でもいって訊いてみなはれ。」

夢々疑うこと勿れ善哉々々云々というなり、ぱっと姿が掻き消えた。

目が醒めて青年は考えた。原子時代に夢判断も糞もない。五キロのキロが気に入らぬ。里と言わない処が怪しい。第一、世之介などと「通俗だ！」と鼻であしらうのが、極めて普通の文学青年の高貴な精神である。然し、青年は生死の岐路にあり、縋れる者なら狐狸変化であろうと敢て辞さなかった。立ち所に世之介を訪れる決心をなし朝食後、一文字に東南の方角を目指し宿を後にした。

東南五キロ半の地において、青年は、目指す世之介の家を難なく探しあてた。冠木門のある、意外に風流な家であった。掃除も行届き、立木の色もよく、一見して頷ける節があった。冠木門の柱に、

猛犬アリ。押売リ行商ノ類、
平ニオ断リ申候。

と貼紙があり、いささか風致を損ねた。然し青年はさすが一芸に秀ずる程の者は何処となく変っておると内心感じ入り門をくぐり玉砂利を踏み、やがて内玄関へ訪れた。

期待で興奮しつつ案内を乞うと、奥より若々しく生気潑剌とした男の声が答え、玄関へ五十前後と見える主が現れた。青年には判らなかったが、渋く粋な着物をぞろりと主は着流してい

た。う散臭さそうに、且つ女でなく失望した如く、青年を見下し、
「保険屋かね、あたしゃ保険は嫌いだよ入りゃしないよ。」
突慳貪に言った。青年は自らの風体の保険屋に似たことを恐縮しながら、先生の御高見を伺いたく参上した者であると、誠心を面に表して答えた。
「それじゃなんだね、銭のいらねえことなんだね。」
不審の面持で重ねて主は念を押した。そして、「それじゃ、まあ、上んな。」と青年を座敷へ案内した。
六畳の座敷で、床があり、その上に菊倍判厚さ四寸余の経文ていの品が置かれてある。金襴の表のその品の前に、香炉、鉦、花、燭台が飾られ、燭台には灯明があげられている。最前まで主は礼拝していたものと見えた。
右手は襖、襖の絵は裾を乱し散を乱し美女幾百人が、何物にか驚き逃げる様子である。斯くも多数の美女を驚愕仰天させる本体は、何者であろうと青年は好奇心に駆られた。然し遺憾ながら、本体は奥床しくも襖の向う側に描かれているため、それを拝すを得なかった。左手は庭であり、その中ほどに木の葉型の泉水があった。主は中々信心家らしく、泉水の中央の小島にも小祠が祭られて見えた。青年は感服し、試みに問うた。
「あれは、なに様を祭ってあるのでござりましょうか。」
すると主は事もなげに、答えた。

「なあに、弁天さんですよ、そのこっちが金精さまでね。」
成程、語られてみれば、頃は四月であり、岸辺になよなよと春草も揺れ、極めて眺めがよかった。
感嘆して暫く青年は心魂を放って見とれていると、主から声がかかった。
「ところで、あんたの商売は？」
「作家の卵だす。」
「するてえと、あたしに話を聴いて、流行のエロ小説を書きてえと言うわけか、図星だろう、え？　おや馬鹿に照れるじゃねえか、いいってことよ、恥かしがらなくったってよ。実は、あたしもね、この頃のエロ小説ってのを読んでみてさ、癇に触っているわけさ。肉体がどうだか考えたとか、開放しろだとかさ、いってえありゃなんでえ、馬鹿々々しくって聞いちゃいられねえ。え、そうだろう、女というものは、とかく飽きられやすく出来てるもんだ、一緒に暮していりゃ鼻につくというもんだ。ヴァン・デ・ヴェルデの旦那から極意皆伝されたって、一年もすりゃ面白くもなくなる。相場は極っている。色ってなあ、そいつをなんとかうまく胡魔化すことよ。孔子さんがさ、男女七歳ニシテ席ヲ同ジュウセズってよ。含蓄のあることを言ってるじゃねえか、これだよ。侍だってよ、昼間のうちゃ奥方さんとよ、まるで赤の他人で御座るってな七面倒臭せえ顔をしているから、傍で見りゃ窮屈なもんだてえことになるが、どっこいそうじゃねえ、夜になりゃ夜叉と餓鬼だ。鯱こ張った味が忘られねえというわけさ。それを開放開

放自由だなんて言ってさ、口説く必要もなくなり、どうだい、OKじゃ、まるきり面白くなくなるじゃねえか。さしずめあたしなんか厭世自殺だね、まったく。だからね、あたしゃ、肉体文学迷惑論ってのを、書いてやりてえと思っているところさ。いやまったくこの頃のエロ小説ってのは、色気なんかこれっぽっちもなし、書いた本人は蘊蓄をかたむけているんだろうが、あれじゃ、そこいらの八百屋の亭主やアロハの兄ちゃんのほうが、余程蘊蓄があるってわけよ。誰が読むのか、あたしゃ解せないね。書くほうも書く奴だが、時にいってえ、作家ってなあ、女郎買いに行ったことがねえものかね？」

先程より青年は主の前に端座し、主の語るを唯々拝聴していた。元来青年はエロ文学を先日まで軽蔑し、読んだことすらないため、左程興味は感じられなかった。昨夜、確か六十九歳と世之介は告げたが、音声は朗々皮膚に脂がのり、頭こそ禿げていたものの、五十少々としか見受けられず、不審を覚えていた。夢に対しての信頼も漸く動揺するまま、「女郎買いの方は一向に存じまへん。」と答えながら、主の齢を訊ねた。

「まことにつかぬことでござりますが、お齢はなんぼにおなりなはって。」

と言ううち、主は、ぽっと頬に紅葉を散らし、狼狽して遮った。

「野暮いうもんじゃないよ、恥をかかしちゃいけないよ。これであたしゃずっと二十歳の気でいるんだから。なあに、いいんだよ、しょげなくたって、どうも芸術家ってなあ、難しいね。なあに歳はね。ざっとでいいだろ、コンドームが日本へ来た頃さ。あたしの家は女郎屋でね、

親父夫婦が伝統の技術を廃めて、使ってみたわけさ、こいつぁべらぼうに便利がいいってね、商売にも役に立つかもしれねえというんで、それを試験中さ、初めてのこったからうまくいかない、途中でとれちまって慌てたもんさ。箸に綿をつけて取ろうとするとどんどん奥へ入っちまう、綿まではずれて入っちまった。医者に見せるのは銭が惜しい、放って置けってんで放って置いたそうだよ。ところでそれが因でお袋は懐妊となった。その子がかくいう拙者であるが、十月十日が経ち丸々と肥った、可愛い子がオギャアと出来た。生れた時から、ちゃんと木綿のお襁褓をあて、ゴムのオシメカバーをして現れた利口な子供だよ。」

「はあ。」

「はあとは頼りないね、この人は。ところでこの子は世之介と名附けられ、しかたがねえので銭がかかるが育てられた。生れた時は神様かと思った通り、頭がいいと言ったら譬えようがない。這ってる頃から算盤をはじく、客が来ると懐の温い寒いを見分けてくれる。抱えた女郎が喜んだ。こんな子を神童というのだろうてんで、二つ三つは神童で誉れが高い、そのうち四つ五つになるといくらか格が落ち才子となった。どうもこの頃うちの伜はもの覚えが悪くなったと、親父夫婦も心配したものさ。なあに別になんでもない、色気がつきだしただけなのさ、人間どんな覚えのよい野郎でも、色気が出ると呆けて来る。六つになった頃にゃ、才子からもう一つお安くなって、並みの鼻垂小僧となった。もっとも紙だけはふんだんにある家だから、鼻は垂さない。その代り、折目のついた着物でなけりゃ気に入らない。寒中だって単衣の着物を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ei

ぞろりと着流しだ。風邪をひくと女郎が案じて、ちゃんちゃんこを持って行くと、流し目で見て相手にしない。おめえだっていなせな男が好いたらしいもんだろう、伊達は薄着だと昔から相場が決ってる。業平の権八がちゃんちゃんこを着ちゃ見られねえじゃないかと逆ねじくわす。近所界隈に同じ年頃の子供がいるが、てんで見向きもしない。何処だかのお職は歩く時の姿がいいとか、何屋のお職はどうも下品でいけねえ、あれを抱く男の気がしれねえなどと、女のことしか興味がない。年頃になったらどんな男になるかと、近所界隈で心配の種なんだ。今のうちは子供だからいいだろうと、親父夫婦も案じちゃいるが、安心しておった。ところがだよ、聞いているのかね、芸術家。」

「はあ。」

「また、はあかね。つきあいにくいね、この人は。これからが肝心なところだよ、肝心な。その頃抱えの女郎にお職をはった八橋という女があった。齢のころは芳紀まさに二十一だ、秋田の在の百姓の娘だが、情があって愛想がよく渋皮のむけたよい女だ。この八橋ってえのが如何したわけか滅法あたしを可愛がる。客からさんざんしぼって、それを貢いでくれる。渋皮がむけていようと、家にいる女じゃあたしだって気がのらない。体よくあしらっていたものだが、情をつくされりゃあたしだって人間だ。万ざらいやな顔ばかりもしていられねえ。親の目もあるから、そのうちまあ折を見てなんとか方便を考えてやろうと思っていたわけさ。ところが忘れもしねえ、雪の降る日のこった。八橋のところで差し向いにしんねりと炬燵にあたり近所の娘

の品さだめと洒落ていると、何を想ったのか八橋が、
『世之介さん、いくつだったかえ？』
とあたしの顔を凝っと熱っぽい目で、こういうふうに見ていうわけさ。
そこであたしはさ、
『いってえ、今さらどうしたもんだ、馬鹿に今日はぼっとなってるじゃねえか、あたしゃ数え年で六つだよ、年があけりゃ七つになる。』
とまあ言ったもんだよ。するてえと、
『わちきを嫁子にしてくんなますかえ？』
心持ち掃いたようにさ微笑ってね、でれッとあたしを口説いた。いくら可哀相だって、女房に出来る女じゃねえ、といって断るのも気の毒だとあたしは思案にくれちまって、しかたがねえから黙っていたさ。そのあたしを見て辛さを笑いで胡魔化して八橋のやつ、げらげら笑いにじり寄って来て、
『こんなお婆さんじゃ、どうせ、いやでありんしょう。』
とまあ怨みのたけを言うわけさ。それほどまで言うなら、あたしだって情にほだされる。女房にするわけにゃいかねえが、可愛がるくれえなら可愛がってやってもいいと、そういって、そこで八橋を抱き、思いを遂げさしてやったという次第さ。それで済めばよかったが、一度が二度になり、二度が三度となり、到頭親の目を忍ぶ仲となった。ところで、一向笑いもしねえ

が芸術家、おや、またはあかね。難しい気性だね、この人は。ところで、ええと、何処まで話したかね。」

「忍ぶ仲でござります。」

「そうだ、その忍ぶ仲だよ、これからが大変だ。肝心な中の肝心だ。忍ぶ仲になると相手が夜ごと枕の変る女郎であろうとなんだろうと、他の男が来れば腹が立つ。嫉妬という奴だがねえそれが。夜が近づくと落着かない。第一夕食が碌々喉へ通らない。親父とお袋にあやされて川の字の真中で寝ていても、気が立ってまるきり眠られない。むらむらっと癇癪が起き、寝小便でもしてやろうかと思うほどだ。芸術家だって嫉妬の覚えはあるだろう。さてある晩のことだよ、ここからが人生の真理だよ、丹田に力をこめて聞くのだよ。あんまり腹が立つから、お袋のオッパイをいじるのを廃めて、中庭へ出た。その中庭の木の陰で、八橋の部屋の様子を覗った。寒中のことだからがたがた慄えて来る。聞えてくるのは鶯の声ばかりだ。向ッ腹が立つから足元の小石を拾い、ここぞと思うあたりへ糞っと投げ込んだ。それがぴったり当ったね。『あ、痛ててて』と客の悲鳴が挙ったね。

ところがこの客てえのが、牛込矢来下の遊人で、気の強い江戸ッ子だ。どうやら頭へ当ったらしいから、さあ、承知をしねえというところだ。

『こっちから飛んで来やがった、何処のどいつだ。』とかなんとか喚きだした。するてえと八橋が『いいえ、主さん、こっちの往来からでありんす。銭のない男が、大方、八ツ当りしたも

のでありんしょう。』甘ったれてなだめたさ。
『右の往来からの石が、左の頭へ当るてえ法があるけえ。』
『じゃとゆうても主さんは下向きざます。わちきは上向きで、現にこの目で見たでありんす。』
べらぼうに客の声が大きいから、とてもそれでおさまるとは、考えられねえ。あたしゃ逃げ出そうかと思案していると、あきれたね。その野郎がこう言った。
『可愛いおめえが見たと言うなら、それに違えねえだろう。左の頭に瘤が出来たが、こいつぁ、右の頭に石が当ったその拍子、大方慌てて右と左を間違えて、左へぽっと出たのだろう。呆れけえった慌てもんの瘤野郎よ。』
全く呆れた瘤でありんすとかなんとか言う八橋の声が聞え、それきりさ。あたしゃ、寒中の夜空の下で、あきれけえって慄えがとまったね。つくづくあたしは考えた。こいつぁ他山の石じゃねえ、このあたしだって、寒中お袋のふところから飛びだし、夜風に晒され慄えているじゃねえか。男っていうものは、全く甘く出来てやがる。生れつきだらしがなく出来てやがる。せめて、あたしだけでも広い世間の男のために、面目のためにさ、女なんぞにだまされねえ、男の中の男になりたい。人から羨まれる、甘くねえ男になりたいと、その時さ、芯からきっぱりと志を立てたもんさ。それからこの齢まで、あたしは三千七百四十三人てえ女に……」
その少し以前より、勝手口から他出中の家人が立ち戻ったらしく、茶器の物音が幽かに流れだした。それと共に主の声は次第とひそまっていた。

やがて、横手の襖が静かに開かれると、突如として主の語気は強まった。
「いや全く、西郷隆盛は偉い、偉い、大人物だよ。」
青年は突如として変化した話題に、暫し呆然とした。併し、女房を畏怖するは、今昔東西、強弱貧富を問わず、これ真理である。俊敏にも青年はそれと気づくと、立ち所に応酬した。
「いや全く、西郷さんは大人物だす、堂々としてはりまっせ。」
「いや全く、堂々たる人物じゃ、西郷は、腹が太い、太腹だね。ああいう人物は、現代には居らんよ、ああいう尻の穴の大きいのはねえ。」
「いや全く、人間はうんこの大きいのが何よりだっせ。」
と迎合しかけ、青年は言葉を呑んだ。襖より現れ近づく妙齢な女性へ、思わず目をとめた。齢の頃二十歳前後、茶をささげ立つ姿は芍薬、歩く姿は百合の花、目前に坐せば即ち牡丹——正に世にいう如き理想の和装美人であった。発情期の男子が一瞥すれば、即座に、気絶するであろうと思われた。
幸い、青年はインポでありしため、わずかに気絶の難を免れるを得た。然し心気自ら錯乱し、忽ち座蒲団より転げ落ちて、訥弁を振いだした。
「不肖、私は、今般、大阪上本町より、はるばると、遠路を、先生の御高名を慕うて、ここにまかり出ました者でありまして、只今先生より、数々、その人生の機微についての御高説、並びに文学論を伺っておりますところでありまして、その上、これはまたまことに結構なる奥様

に、拝顔の栄に浴しまして不肖私の最も欣快といたすところであります。」

云々と青年は語った。

茶を差し置いた妙齢な女性は、青年の律義な挨拶に、極めて当惑した如く見受けられた。固より教養ある女性であるから、もっぱら頬を赧らめ、楚々と顔を伏せた。折から一陣の薫風が庭前より渡り来たって、彼女の艶麗なパアマネントウェーヴを打ちふるわした。消え入るばかりの風情にて、漸く青年へ答えて口ごもりつつ言った。

「あノウ、あたくし娘なんですけど。」

その言葉に一瞬、青年の狼狽はその極に達した。額に汗し、言うを知らぬ青年の周章した姿を、世の辛き酸っぱき味をナメつくしている主は、気軽く且つ鷹揚にとりなした。

「なあに、いつものこってね、表なんか歩いていると間違えられて、困るんだよ、しかし、娘でね、独り娘で目に入れても痛くない。女はわが娘にとどめを刺すね、君、中々いいだろう。」

「はあ。」

「ここまで丹精するには骨が折れる。」

「はあ。」

「眉子というんだ、断っとくが惚れちゃいけないよ、これ眉子や。」

「はい。」

「こちらのお方は芸術家さんだよ。芸術家てえものは笑っちゃいけねえものらしい。後学のた

试读结束：需要全本请在线购买： www.ei